

新旧融和の家

～ふた間の和室を残して～



丹波の緑豊かな山々の麓に佇む、築70年の民家。
この家と家族が歩んできた歴史を、次の世代へ受け継いでいきたい。
隠れていた梁を生かした勾配天井のあるリビング、機能的かつゆとりのあるキッチン。
古きものが家族の思い出をつなぎ、新しきものが日々の生活にハリをもたらす。
そんな、大人のためのリノベーションを目指した。



長年、屋根裏で家を支えてきた大きな梁や、こどもの成長記録が刻まれた柱が見える。
大切に残した構造材がこの家の歴史を伝える。



畳にゴロンと横になり、庭の緑に目をやる。通風やセミの鳴き声は、こどもの頃と変わらない。この夏遊びに来る孫との時間に自然と思い巡る。

次の世代へ受け継ぎたい。
職人の手仕事の素晴らしさと、
家に刻まれていた家族の記憶。

隠れていた梁にこの家の歴史を感じる。
ふた間の和室はそのままに断熱性を高め、
リビングにはこどもの成長記録が刻まれた柱を残した。

そこにあるのは、当時の大工さんたちの丁寧な手仕事、
苦勞の据えに一軒家を建てたご両親の想い、
さらには、70年分の家族へのリスペクトがあった。

きっかけは、夫婦の定年退職。使われなくなった、もしくは物置
と化した、思い出のある部屋たち。
ふと思う。

住まいが生まれ変われば、家族の暮らしも自然と変化する。
ご主人は、仲間を招いて中庭でバーベキューすることを妄想し、
奥さまは、新しいキッチンで、自分たちが育てた野菜を調理する
姿を想像した。

休暇になれば、離れて暮らす家族も帰郷して、この家が一気に
にぎやかになることを心待ちにした。
2階の広々としたスペースで、みんなで雑魚寝を楽しむのだとか。

残したものや部屋が、ここで過ごした家族の記憶をつなぐ。
永く住み続けられるよう耐震性能も備えた。
新旧の価値が程よく融和したこの家が、家族のこれからの
暮らしをつくる。

－ ふた間の和室を残す意味 －

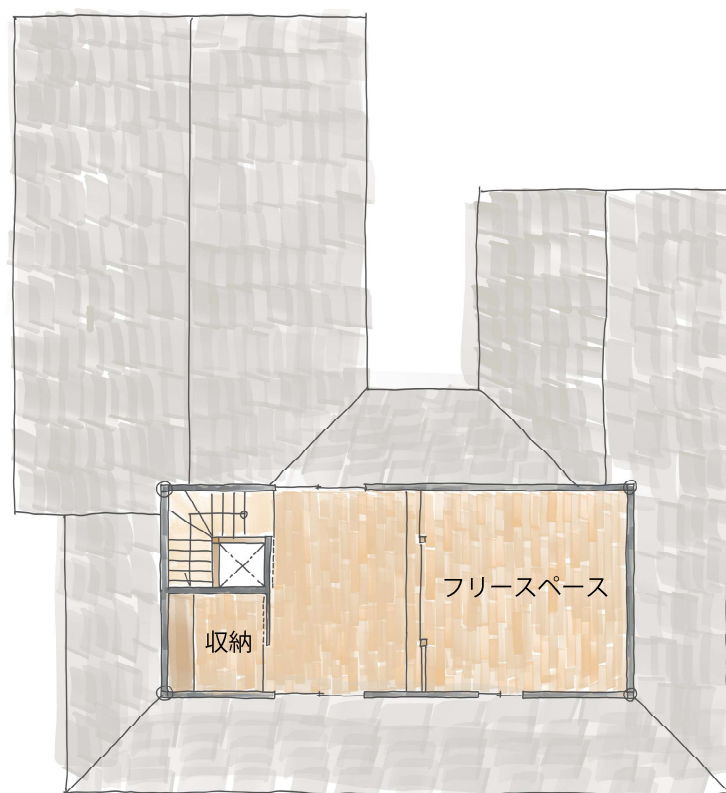
この家は昔ながらの仏間やロの間、そして玄関が南に面したスペースを占める。
そこにLDKを配置すれば、今より明るく、風通しのよいLDKとなるに違いない。
しかし、新築では再現できない古いからこそその風合いや、当時の職人さんたちの手仕事が残るこの和室を大事にしたい。

ふた間の和室は、施主にとってこどもの頃と変わらない景色、虫の鳴き声や風が運ぶ雨の匂いを感じられる、家族と過ごした
日々の記憶が蘇る大切な場所。
そんな贅沢な時間を感じられるのは、先祖が丁寧に住み継いできてくれたから、大切に家を守ってくれたから。
だからこそ、この特別な場所を次の世代へ受け継ぐため、残し活かすことにした。

F邸
◆外部仕上げ
屋根：既存瓦葺き
外壁：ガルバリウム鋼板一部リシン吹付け
◆内部仕上げ
床：杉、桧（丹波市産材）、アカシア、 既存タタミ
壁：漆喰、紙クロス
天井：杉（丹波市産材）、紙クロス
建築面積： 120.32㎡
1階床面積：113.27㎡
2階床面積： 34.92㎡
延べ床面積：148.19㎡
耐震改修計画：芦田成人建築設計事務所



1 F



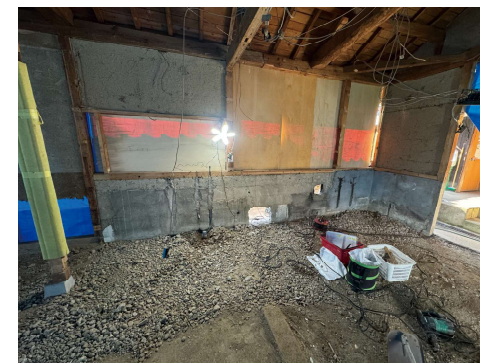
2 F

－ 永く住み続けるために －

耐震改修を行い、評点 0.22 から評点 1.00 まで上げた。

6段重ねのコンクリートブロックの上に土台が敷かれた箇所があり、
部分によってはポストで梁を受け、立ち上がりの基礎を施工。

兵庫県の住宅耐震化補助金を受け、耐震工事の費用に充当することができた。



(解体時)



(解体時)



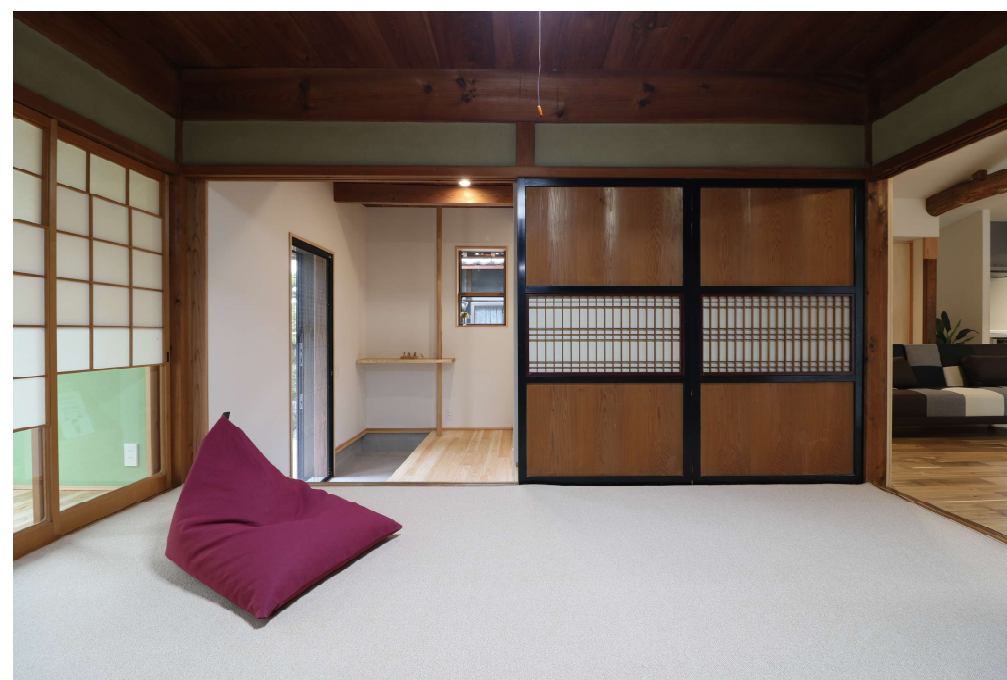
(基礎工事中)



(木工事中)



勝手口から入って洗面台で手を洗い、冷蔵庫を開けビールを片手にリビングに向かうのが普段の生活動線。
ソファに座れば、和室や中庭との緩やかな空間のつながりが、畳数以上の広がりを感じさせる。



地元丹波の山で採れた桧の床の玄関と、昔ながらの口の間が来客を迎える。
70年前の職人の技が垣間見える既存建具や大和天井が残る、ずっと変わらない和室。
新しくなった玄関やリビングの設えとも融和した空間に仕上げた。



ひと間にまとめた、2階のフリースペース。家族の帰省時には、ここで布団を並べて雑魚寝をする。
1階の仏間と口の間の階高をそのまま利用し、段差をつかったことでステージが誕生。
孫がダンスを踊ったり、孫とおしゃべりするベンチにもなる。